

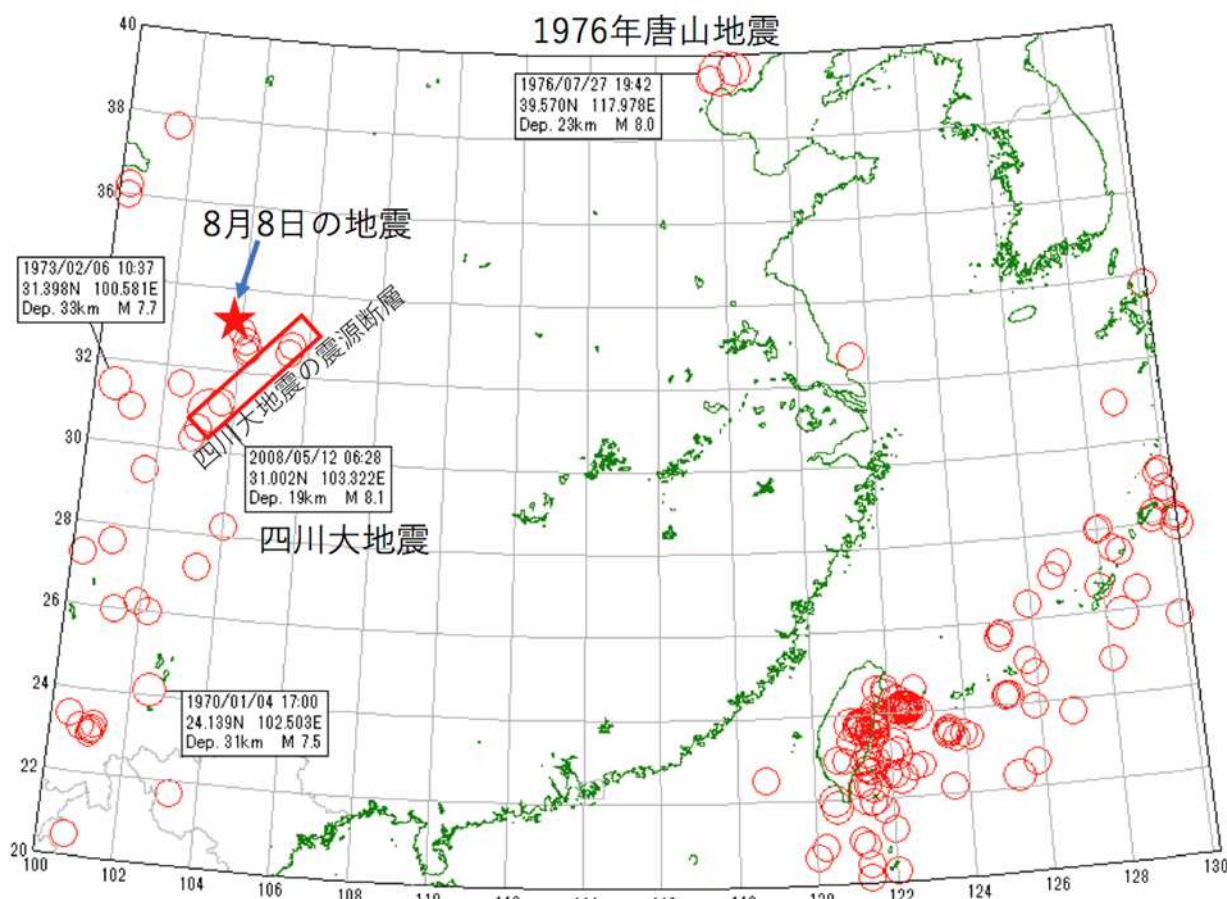


## 中国四川省で地震

各種メディアで報道されていますが、8月8日に中国四川省でマグニチュード7.0の地震が発生しました。いわゆる内陸直下型地震で、熊本地震と同じような規模の地震と考えて頂いて結構です。世界遺産の九寨溝が近いという事で観光業にも影響が出るのではと地元では危惧されています。図は1970年から2016年末までのマグニチュード6以上の全ての地震を示しています。ちなみにこの図から、台湾がいかに地震活動度が高いという事もわかりいただけるかと思えます。

四川省では2008年にマグニチュード8.1の巨大地震（四川大地震）が発生し、9万人近くが死亡したとされています。この地震は内陸の地震としては最大規模のもので、図中に震源断層を記入しました。長さ300kmを越える極めて大規模な破壊を伴った地震でした。

8月8日の地震はこの四川大地震の広い意味での余震とも考えられる地震ですが、中国内陸部は活断層が多く、これはインドがユーラシア大陸に衝突している事がその根本原因です。地球が生きているという証拠です。



また図の一番上に近代の中国で最大の死者を出した1976年の唐山地震の位置も記載しています。ちなみに1976年は中華人民共和国にとって『最悪の年』として記憶されています。これは1月8日に周恩来首相が亡くなり、7月にはこの唐山地震で公式記録でも24万人以上が死亡し、9月9日には毛沢東主席が亡くなるという事がありました。唐山地震は、20世紀最大の死者を



出した地震であり、公式記録では上記24万人、米国地質調査所の推計では60万人以上となっています。

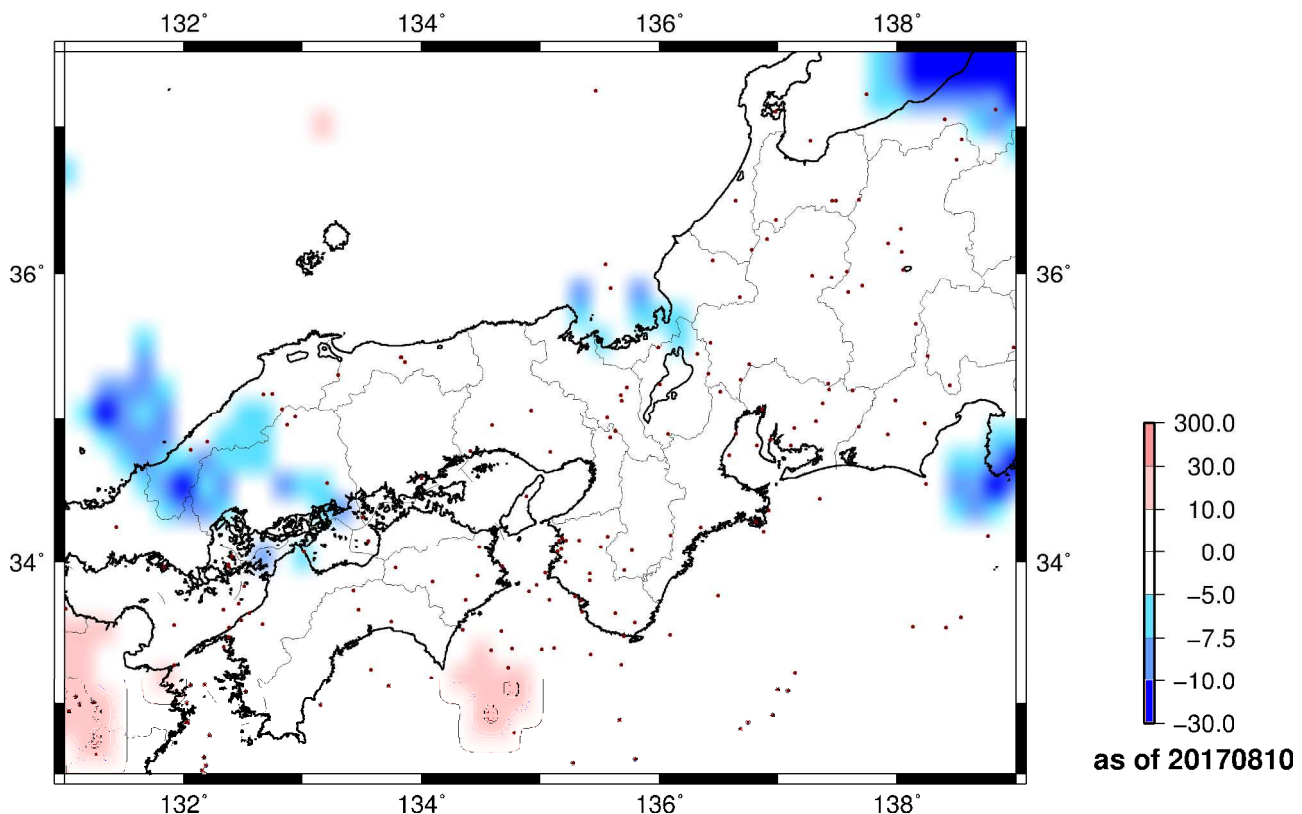
## 上高地・焼岳で噴気

8月10日、気象庁は上高地近くの焼岳で小規模な噴気を確認したと発表しました。気象庁によれば山頂の西側およそ400メートル付近の山腹において白色の噴気を確認しました。このうち、8月10日午前0時すぎに確認された噴気は、およそ100メートル程度上昇した事が監視カメラにより確認されています。山の日を前にして、改めて焼岳が活火山である事を主張したのかもしれませんが。ちなみに観光名所となっている大正池は、1915年（大正4年）の噴火で、泥流が梓川を堰き止めて形成されたものです。

現時点で焼岳がすぐ噴火するという兆候はありませんが、夏休み中という事もあり、焼岳だけでなく、火山周辺に観光に行かれる場合にはぜひ火山情報にも注意して頂きたいと思います。

## 中部・近畿・中国・四国地方の地下天気図<sup>®</sup>解析

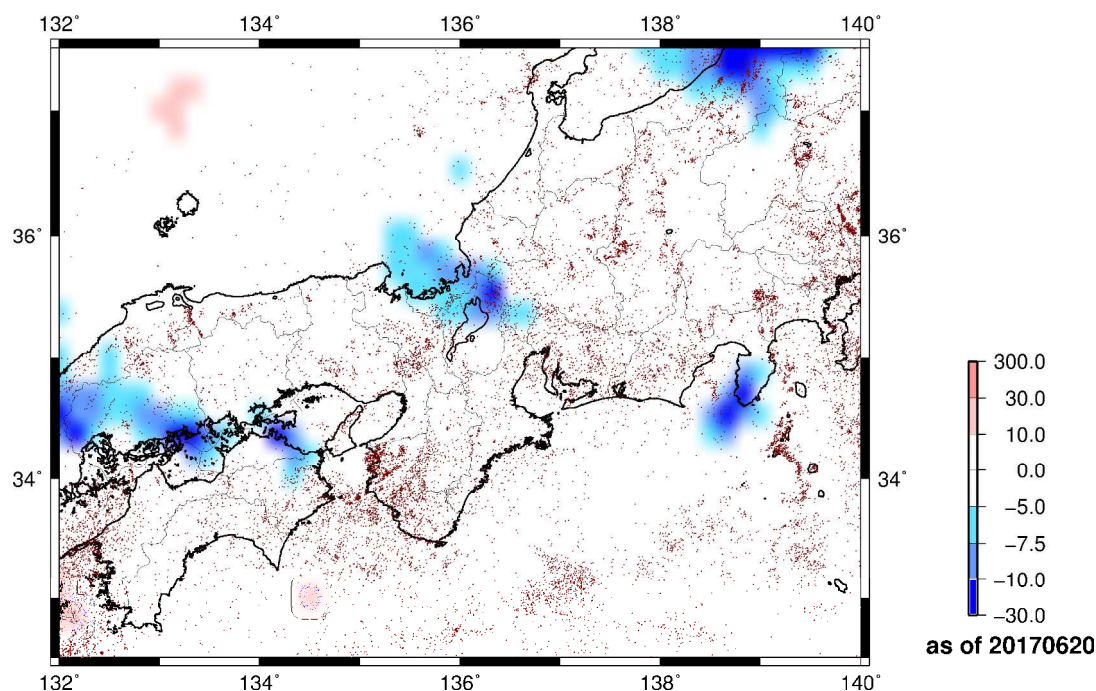
6月26日のニュースレターに引き続き、中部・近畿・中国・四国地方の8月10日時点の地下天気図です。この地下天気図解析では、2001年以降の16年間の地震データを使っています。従って比較的短期間で大きな変化をしにくいのが特徴です。また関東地方は2011年の東日本大震災の影響を受けており、この長期間の解析では、精度が落ちると考えています。そのため、今回の解析から、表示範囲を少し変更しました（関東地方を一部削除し、九州の一部を含めた）。



8月10日時点の地下天気図。小さな点は前回から8月10日までに発生した地震。



前回、6月20日時点の地下天気図を以下に再掲しますが、中国地方から瀬戸内海の静穏化の異常が少し消えつつある事がわかります。地下天気図解析では、これまでの経験則として、「異常が消えてから地震が発生する可能性が高い」事がわかっています。



なお上の図における小さな点は、地下天気図解析に使用したすべての地震（2000年-2017年6月20日まで）を図示したものです。